

## 学校経営推進費 評価報告書（1年目）

標記について、下記のとおり提出します。

## 1. 事業計画の概要

実施課程名	全日制の課程
取り組む課題	生徒の希望する進路の実現
評価指標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・3年生卒業前アンケートにおける「進路指導による自己の姿容」に関する肯定的回答の向上</li> <li>・授業アンケートにおける「授業に興味・関心をもつことができたと感じている」の肯定的回答の向上</li> <li>・学校教育自己診断（生徒）における「学校で将来の進路や生き方について考える機会がある」の肯定的回答の向上</li> <li>・学校教地内の里山である「裏山」の活用状況（授業・行事・地域連携・ボランティア活動として有効に活用）の向上</li> </ul>
計画名	「刀根山・里山活用プロジェクト～人を育てる拠点として～」

## 2. 事業目標及び本年度の取組み

学校経営計画の 中期的目標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 教員の授業力の強化と「確かな学力」の育成 (3) 生徒の自習力や学習意欲の向上及び整備された教育環境の積極的活用により興味・関心を持たせる。</li> <li>2. 生徒が希望する進路の実現のため、学習指導と進路指導の充実 (1) 3年間を見通した進路指導計画によりキャリア教育を充実させ、大学進学等の目標の実現及び、さらに高い目標の設定とその実現をめざす。</li> <li>4. 地域に開かれた学校づくり (2) 地域との交流・連携を推進することにより、学校を活性化し、学校への信頼を高める。</li> </ol>
事業目標	<p>本校生徒は学力面では中～上位で、大部分がクラブ活動に励み、地域との連携活動やボランティア活動にもよく取り組んでおり、9割程度の生徒は大学進学するものの、将来に対する高い志を抱くことなく、自立的な進路選択や将来計画が希薄なまま進学している者も少なくない状況である。</p> <p>社会人として自立した人を育てるキャリア教育の観点から、これまで「地域連携の拠点」としてきた敷地内にある「裏山」を活用し、観察や実習、里山体験、地域や大学との連携を通して、生徒の自尊感情やモチベーションを高めることで学習への意欲や興味・関心を向上させるとともに、「生きる」意味や「学ぶ」意味を考えさせ、「希望する進路の実現のための拠点」へとシフトしていく。また同時に、災害時のボランティア支援基地として防災教育の推進にも活用する。</p> <p>数値目標としては、3年生卒業前アンケート、授業アンケート、学校教育自己診断、裏山等の活用状況の各指標を向上させていく。</p>
整備した 設備・物品(数量)	<p>剪定用ハサミ(20本) 鞘付き剪定鋸(20本) 立刈り鎌(5本) 替刃式草刈鎌(15本) 羽釜(5台) かまど(5台) 寸胴鍋(6台) ステンレス製メッシュラック(2台) エリア案内板(2台) ビオトープ解説板(1枚) 樹木札(180枚) 樹脂ボール800mm(10本) 樹脂ボール400mm(10本) V型脚300mm(10本) SUSスプリング200mm(60本) 校内植生マップ作成(8000部) 裏山への入口スロープの改修</p>
取組みの 主担・実施者	<p>取組みの主担:「刀根山・里山活用プロジェクトチーム」 取組みの実施者:管理職・首席・関係教科担当者・生物エコ部など関係クラブ顧問・生徒会顧問・有志 → 最終的には全教職員で実施することをめざす</p>
本年度の 取組内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・校内プロジェクト委員会を立ち上げ、平成28年7月25日(月)の第1回から年間7回会議を開催し、情報の共有、取組みの立案、プロジェクトの運営に当たった。構成メンバーは校長・教頭・事務長・首席(2名)・教諭(6名うち1名は講師)・実習教員・校務員の13名。</li> <li>・平成28年9月11日から取り掛かったスロープ工事は10月2日に塗装が終了し、10月11日から使用を開始した。本校生のみならず、教職員・保護者・地域住民・近隣の園児や小学生・大学関係者などが里山に入るための始点としての安全を十分確保できるようになった。</li> <li>・10月20日(木)のLHRで全校生徒を対象に里山に関するアンケートを実施。</li> <li>・11月20日(日)「刀根山芋煮会」を実施。9名の生徒が参加し、今回購入した寸胴鍋、羽釜、かまどを活用し、地域の野外活動指導員の協力を得て、芋煮や燻製を調理するとともに、草木染にも挑戦した。なお、燃料の薪は裏山から採取し、枯れ木から薪を作る方法も指導員に教えていただき、今回購入した保管庫に余った薪を保管した。このイベントを通じて、参加した生徒は指導員の方々と野外活動のこと以外にも、様々な面でコミュニケーションを持つことができた。</li> <li>・11月20日(日)午後から上記の生徒たちは、兵庫県立大学客員教授の浅見佳代先生1名の指導の下、里山において植生調査を実施し、調査方法を勉強するとともに、里山の植生について解説を受けた。</li> <li>・11月27日(日)11名の生徒が、神戸女学院大学教授の遠藤知二先生及び同研究室の大学生の指導の下、ハチやその他昆虫の調査を行った。あらかじめ里山に仕掛けておいた竹製のトラップを回収し、生物実験室でトラップを解体し、中にいる昆虫類を調べ、教授から解説を受けた。(12月6日付朝日新聞朝刊に記事が掲載)</li> <li>・12月15日(木)、今回購入したハサミ・ノコギリ・鎌を活用し、「裏山一斉清掃」を実施。各クラスの環境委員を中心に、PTAの生活委員や教員とともに笹刈り・枯れ枝の伐採・側溝の清掃などを実施。</li> <li>・12月27日(日)、生徒とPTA・地域住民も参加し、裏山で採取した枝や葉を使って門松を作成。</li> <li>・平成29年1月5日(木)、生徒に地域住民も参加し、「春の七草」を採取し、寄せ植えを作成し、校内だけでなく近隣のこども園・小中学校・教育センターに寄贈。</li> <li>・校内植生マップ、樹木札、案内板、解説板の作成に当たり、プロジェクト委員会のメンバーで役割を分担し、実地調査を元にアイデアを練り、業者への発注・納品に至った。</li> <li>・2月15日(水)、1・2年生を対象に里山の活用に関するアンケートを実施。</li> <li>・3月22日(水)、本校教員3名と生徒3名が神戸女学院を訪問し、野崎教授の指導の下、植生調査を実施した。</li> <li>・3月25日(土)、裏山での実習として、専門家の指導の下、準絶滅危惧種であるトタテグモの調査をしたところ複数の巣穴を発見できた。</li> <li>・3月26日(日)～27日(月)、校長と首席が千葉県中央博物館の生態園、及び、国立研究開発法人森林総合研究所を訪問し、本プロジェクトの今後の展開に向け、活動事例や里山林の維持管理のための情報を収集した。</li> <li>・3月28日(火)、本校教員2名と生徒3名が奈良学園中学校・高等学校を訪問し、校内にある里山の視察及び取組みについて説明を受けた。</li> <li>・3月30日(木)、本校の裏山に兵庫県立大学の石田教授を招き、教員3名と生徒3名が植生観察調査を実施した。</li> </ul>
成果の検証方法 と評価指標	<ol style="list-style-type: none"> <li>①3年生卒業前アンケートにおける「自分の希望進路が見えてきた」「進路実現のための自分の課題が見えた」「社会に出ることの意味について考えることができた」「自分自身の適性や特徴について考えることができた」の合計(H27年度70%)を75%に引き上げる。</li> <li>②授業アンケートにおける「授業に興味・関心をもつことができたと感じている」(H27年度77%)を80%に引き上げる。</li> <li>③学校教育自己診断(生徒)における「学校で将来の進路や生き方について考える機会がある」(H27年度82%)を85%に引き上げる。</li> <li>④裏山に関する生徒アンケートにおける「裏山を有効に活用できた」を70%とする。</li> </ol>
自己評価	<p>※(記号説明) 大きく上回った(◎)、上回った(○)、達成できず(△)、実施できず(×)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①の結果は67%であった。この結果について、本プロジェクトの本格的な実施が11月からであったため、3年生が実質的に関与することができなかったことから、アンケートの回答への反映はほとんどされしていないと分析している。(△)</li> <li>②の結果は75%であった。この結果について、现阶段において、本プロジェクトを授業に直接結び付けられるレベルには達していないと分析している。(△)</li> <li>③の結果は82%であった。この結果について、本プロジェクトの取組みによる効果を多くの生徒が享受するに至っていないと分析している。(△)</li> <li>④の結果は64%であった。この結果については、今年度の本プロジェクトでの取組みに参加できた生徒の数が、まだまだ少ないことを反映しているものと分析している。(△)</li> </ol>
次年度に向けて	<ul style="list-style-type: none"> <li>・上記の自己評価において、全ての指標で目標に到達しなかったが、本プロジェクトの始動が2学期後半であったことが原因であるのは自明である。しかしながら、いくつかの取組みへの生徒自身の参画については、さらなる努力はできたものと反省している。</li> <li>・今年度末には、ハード面(スロープ、校内植生マップ、樹木札、案内板、解説板など)が完成するとともに、生徒への働きかけについての計画や地域・大学等との連携が確立し、ようやく本格的な実施の準備が整った。</li> <li>・次年度の取組みにおける喫緊の課題は、より多くの生徒の参画である。そのため、クラス・クラブ・生徒会・環境委員会などの単位ごとに具体的な実施プランを示し、実際に里山で行動を起こさせていく。内容的には、地域や大学の関係者と観察・調査を通してのコミュニケーションを図ったり、各教科において里山をどのように活用するかを検討し、できる限り授業で取り上げたり、課外活動として、里山で取れた産物や燃料を使ってアクティビティ(調理・草木染・リース作成など)を実施していく。また、その際、生徒会等を通じて広報していく。</li> </ul>